私たちはなぜ「泣いてはいけない」と思っているのか

発表者：田邊　和夏子
指導教員：中間　玲子

【研究の目的】

「泣く」ことについてどのような印象があるだろうか。「笑う」という行為に比べると、「泣く」という行為は悲しい、辛い感情から起こることが多いため、ポジティブというよりマイナスなイメージが私たちは思い浮かぶように思える。日頃場面で考えると、私たちは「泣きたい」という気持ちでいっぱいだが、周りに人がいると、「泣いちゃだめだ」と思い、「泣くこと」を制限することもある。他にも兵庫県某議員が会見で取り乱し号泣する姿が批判的に取り上げられている。このように私たちは「泣く」という感情表現を抑制したり、泣く人を批判的にとらえたりすることがある。しかし、本当に「泣くこと」は私たちが考えるようなマイナスなことばかりなのだろうか。

そこで「泣くこと」は「涙がでる」ことと関連付け、「涙」の様々な価値を調べた。また、実際に私たちは「泣くこと」をどのようにとらえているかを特に厳しく評価されている男性に着目し、歴史的、教育的、教科書的に「泣くこと」における価値を調べた。現代の世間は「泣くこと」においてどのような評価をしているのか、私たちはなぜ「泣いてはいけない」と無意識に、暗黙のルールのように考えられているかを明らかにする。

【論文構成】

序章　はじめに
第一章　「泣く」とはなにか
　第一節　　涙の様々な価値
　第二節　　現代における「泣くこと」とは
第二章　「泣くこと」における男女差
　第一節　　男性は女性より泣かないのか
　第二節　　歴史的男女差
　第三節　　教育における男女差
　第四節　　教科書における男女差
第三章　男性の涙とは
　第一節　男性は泣いてはいけないのか
　第二節　伝統的な男性役割と新しい男性役割とは
第四章　総合考察
　第一節　先行研究からみる涙
　第二節　現代における世間の「泣くこと」に関する考察

【研究概要】

第一章では、トムルッツ(2003)の「人はなぜ泣き、なぜ泣き止むのか　涙の百科全書」を使用しながら、芸術や科学のさまざまな「涙」のとらえ方を紹介し、涙の基本的な知識を多用な観点から捉えた。ここでは、涙には様々な価値があり、決してマイナスなことばかりではないことが見受けられた。またその中で、「泣くこと」において男性は女性よりも泣かないという男女差について着目し、第二章以降で検討していく。

第二章では「泣くこと」における男女差を調べ、男女で泣く頻度が実際に異なっているのかを知るために、先行研究を紹介した。ここでは全体の 4 割はあまり泣いておらず、その中でも男性は女性よりも泣いていないことが伺えた。そのことから、男性が泣くということはどのようにとらえられているかをより深く理解するために、歴史的、教育的に先行研究を紹介している。また教育現場で使われている教科書に着目し、教科書にも「泣くこと」における男女差があり、「泣く」という行為は女性のみで描かれていることが明らかとなった。

第三章では泣く男性は実際どのように思われているかを知るために、関係する先行研究をいくつか紹介した。ここでは、現代の世間は、これまでの結果と違い、「男性が泣くこと」において寛容な態度であることが伺えた。このことから、現代ではどのような「男性性」が求められているのかを明らかにするために関連する先行研究を紹介した。すると、ここから現代の男性性は昔と異なり女性に気遣う家庭的であり、男性と女性の間で強さにおける差はなくなっていることが伺えた。しかしその一方で、男性は頼られる存在であり、積極性が必要とされるという風潮も見られると考える。そのため第二章の第一節で明らかとなったように男性は女性より泣かない結果になっているのではないかと推測した。

第四章ではこれまでの先行研究の紹介や議論を整理し、現代における世間の「泣くこと」を考察した。これまでは世間は「泣いてはいけない」と思っているのではないか、ということについて様々な観点から述べたが、現代ではそれと反するようなことが流行っている。「涙活」である。ここでは、「涙活」によって「涙を流す」という行為に着目し、「涙を流す」ことでストレス緩和に効果があることを先行研究から明らかにした。ここから「泣くこと」は世間で許される風潮になりつつあるのではないかと考える。しかし、この現象は逆に泣く場所を提供しないと泣けない世間になりつつあるとも考える。つまり、「泣くこと」に関して世間は寛容な態度をとっている反面、私たちは依然に「泣いてはいけない」と感じているのではないか。

【主要参考文献】

・トム・ルッツ（2003）『人はなぜ泣き,なぜ泣きやむのか？—涙の百科全書』（別宮貞徳・藤田美砂子・栗山節子訳）八坂書房.

・渡邊寛（2017）「多様化する男性役割の構造—伝統的な男性役割と新しい男性役割を特徴づける 4 領域の提示」『心理学評論』60（2）,筑波大学.